現代“ふしことば”論
―― その教育的意義と楽理的検証 ――

Contemporary fushi-kotoba: Analysing their
educational significance in the light of musical principles

武　田　道　子
Michiko　TAKEDA

（平成8年10月7日受理）

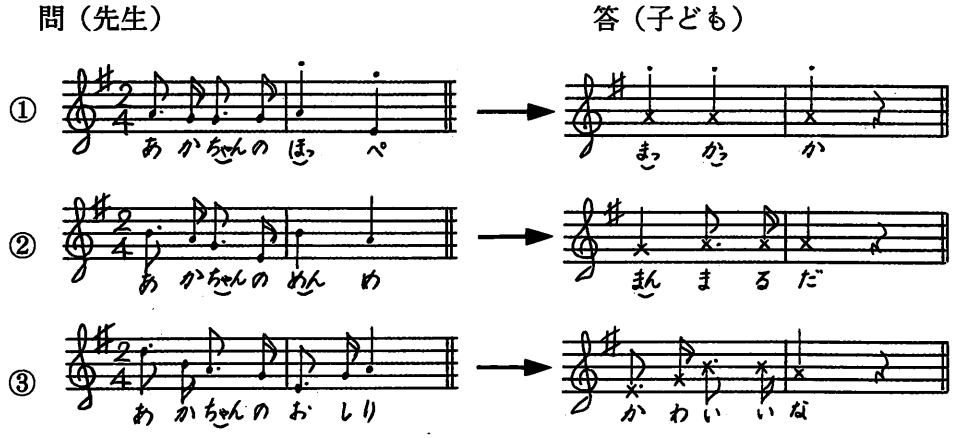
Ⅰ．序　論

陽の旋法を主軸とする日本旋律は、日本語がもつアクセントや抑揚をそのままにしたいわゆる“ふしことば”の次元のものを母体として誕生～進展したものである。つまり、くずれることのない強固な基盤の上に立ったものと言うことができる。

そして、この“ふしことば”の発想は、天衣無縫、闊達自由の幼少期において早くも顕著であり、遊びの中や生活の中で、時として呼びかけことばであったり、はやしことばであったり……その他、実に何ともかわいらしい多様な形態で即興的に発現するものである。

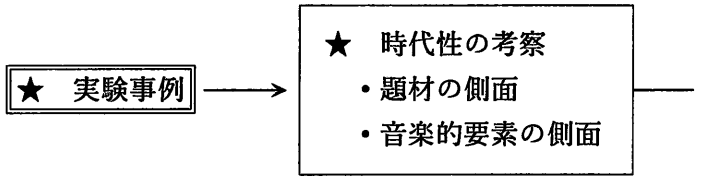
＜事例＞　“赤ちゃん”……お人形遊びでのあやしことば

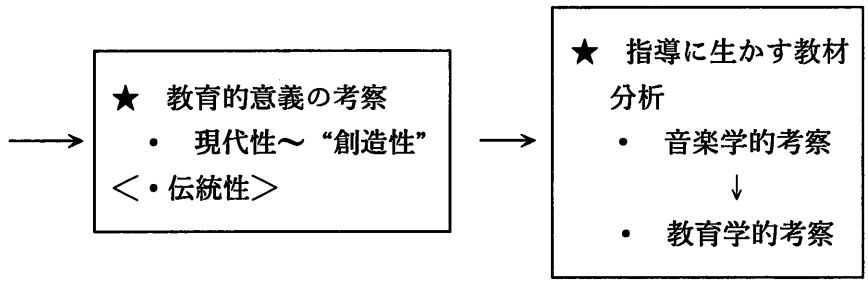
譜1



注）　符頭を×印にした子どもの答の部分は、たどたどしく不確かとも思える即興表現でも、その気分の所在を汲んで、教師において階名に翻訳、採譜したものである。

さて、主題に迫るべく、論証の枠組みを、大まかな流れにおいて次の様に構想したいと思う。
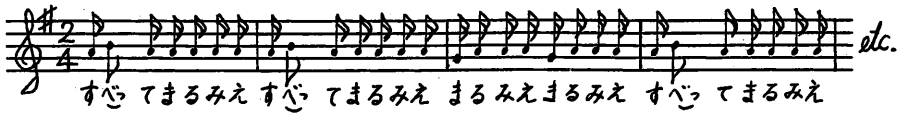




Ⅱ　“ふしことば”の実験事例にみる『現代性』

“ふしことば”は、今の世の中にあって果してどうなのか――これは、真っ先に心配されることである。2つの視点から考察を試みたい。

1．題材内容の側面から

譜2
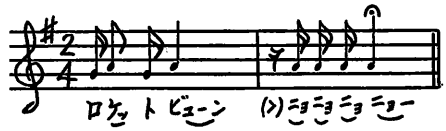


これは、教育実習生が子どもから受けたすべり台遊びでの“からかいことば”である。（平成6年6月　於、静岡市F幼稚園）

今のいたずらっこの姿がそのままの素材であり、はみ出した部分の指導が残るのも当然である。但し、この即興性に於ては、もうこの上なく素晴らしいものと言わねばならない。“ふしことば”そのものは健在である。

では、この現代っ子の傾向を示す模式的なかわいらしい作例から幾つかを取り上げてみよう。
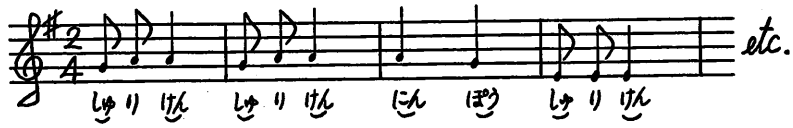
譜3

①　「ロケット」
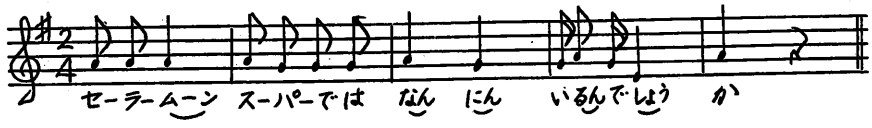


注）愉快で奇抜な擬音・態表現（特に、後半部分）

②　「手りけん」



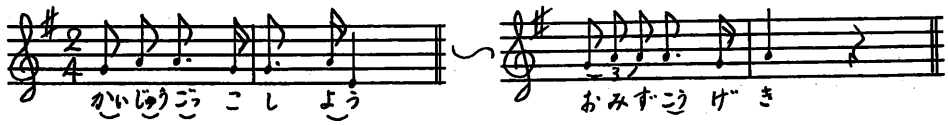
注）男の子に興味津々の素材

③　「セーラームーン」
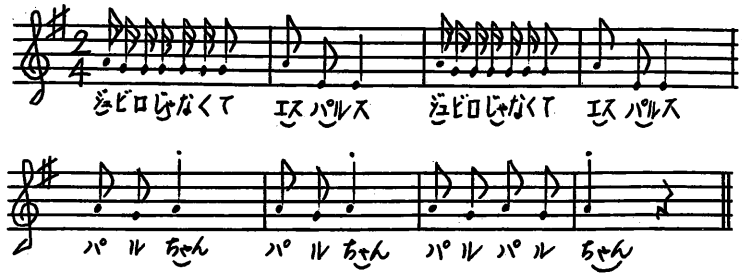


注）人気の「セーラームーン」～奇数小節の自由な変則フレーズ

④　「かいじゅうごっこ」



注）かわいらしい“おみずこうげき”の発想

⑤　「パルちゃん」



注）パルちゃんはエスパルスのマスコット人形～“大好き”

なお、数多い事例を題材そのものを視点にみる限り、今も昔も変らない共通部分が出てくるのは当然のことである。
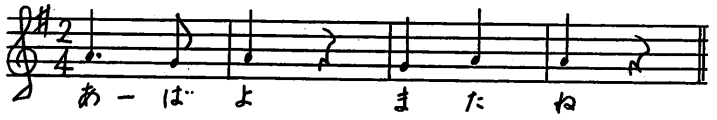
例えば、次のような例がある。

「かくれんぼ」・「おばけ」・「買いものごっこ」・「ままごと」・「雨」・「ひなまつり」・「たなばた」・「カルタとり」等々
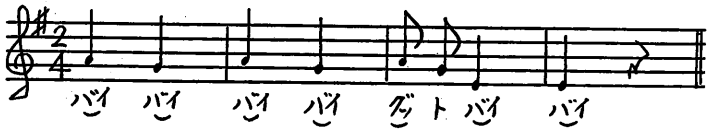
しかし又、ここにおいても、素材的には同じ様であっても、今のものは昔のものに比べて、その姿態を大きく変えていることにも気づくのである。

譜4
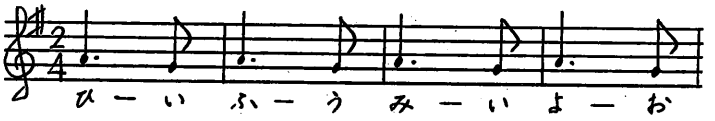
①┌昔の“ふしことば”
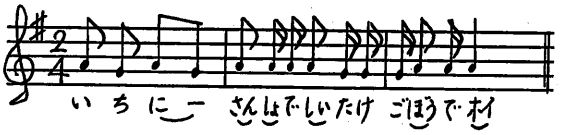


└今の“ふしことば”



②┌昔の“ふしことば”



└今の“ふしことば”



さて、以上においては、次項「音楽的要素の側面から」での指摘事項（特にリズム、速度、強弱の観点）に深くかかわりをもつものと考えられる。全くのところ“いちぬけた　にぬけた”・“ままごとしましょう”の時世とは隔絶の感があるのである。

2．音楽的要素の側面から

“ふしことば”にみる現代性の反映は、構成要素のリズム、表現要素の速度・強弱に於て極めて顕著である。教育現場に一般的な分類の別に考察を試みると、結果の要点を概略次のようにまとめることができる。

☆　音楽の構成要素の面から

＊　リズム……現代的、しゃれたリズム表現の片影を抽出することができる。

＊　旋律……この側面は、やはり伝統性の本質部分(「Ⅲ“ふしことば”を起点とする音楽指導の意義」の「1民族音楽としての伝統性尊重の立場から」に関連）そのものであって、現代性が云々の域には至っていない。

Dur•Mollの世界との調和・融和のことは、もうしばらく先のことになろう。このこ

とは、今後大きな論議を呼ぶものとして、極めて興味深い問題である。

＊　和声……特記事項なし。

★　音楽の表現要素の面から

＊　速度……現代の遊びや生活内容のはやいテンポを見事に実写している傾向が強い。♪いちぬけた　にぬけた♪の時世ではないということである。

＊　強弱……感情・気分の表現を強弱に委ねた側面が色濃くでている。
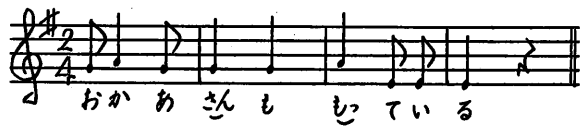
＊　音色……今回の場合、主題の考察には全く関係のない要素である。

以上、時代の変遷に伴なう子どもたちの遊びの変容が、“ふしことば”をかわいらしく変貌させたものと思惟されるのである。その要素の側面での影響は、リズム・速度・強弱の3者に集約されると言えよう。
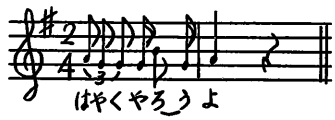
本節考察への作例資料に例えば次の様なものがあった。

譜5
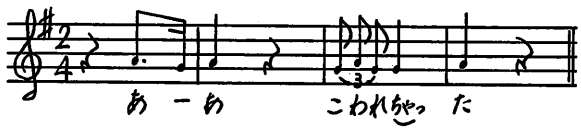
①　リズム

「先生のおさいふ」

注）　シンコペーションのリズム

「サッカー」

注）　3連符のリズム、シンコペーションのリズム

「つみき」

注）　アウフタクトの歌い出し、3連符のリズム

「かいじゅうごっこ」　譜3の④……注）　3連符のリズム

②　旋律（調性）

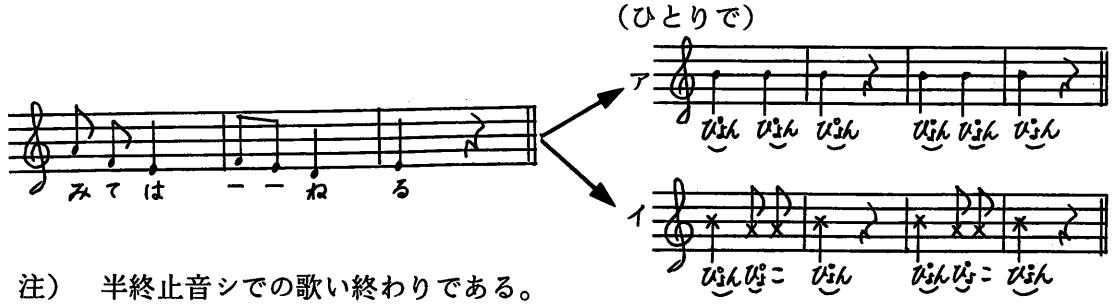
事例は100％と言ってよい位に陽旋（応用）のものが圧倒的で、昔に変らない。陰旋のものは、歌遊びの中に現われた次の1例だけであった。

譜6　「うさぎ」

（みんなで）



（ひとりで）



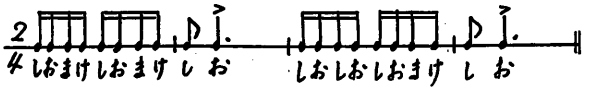
注）　半終止音シでの歌い終わりである。

③　強弱

「うりやさん」　♪いらっしゃい　いらっしゃい　いらっしゃーい♪　注）　強い調子

④　速度

「なめくじ」
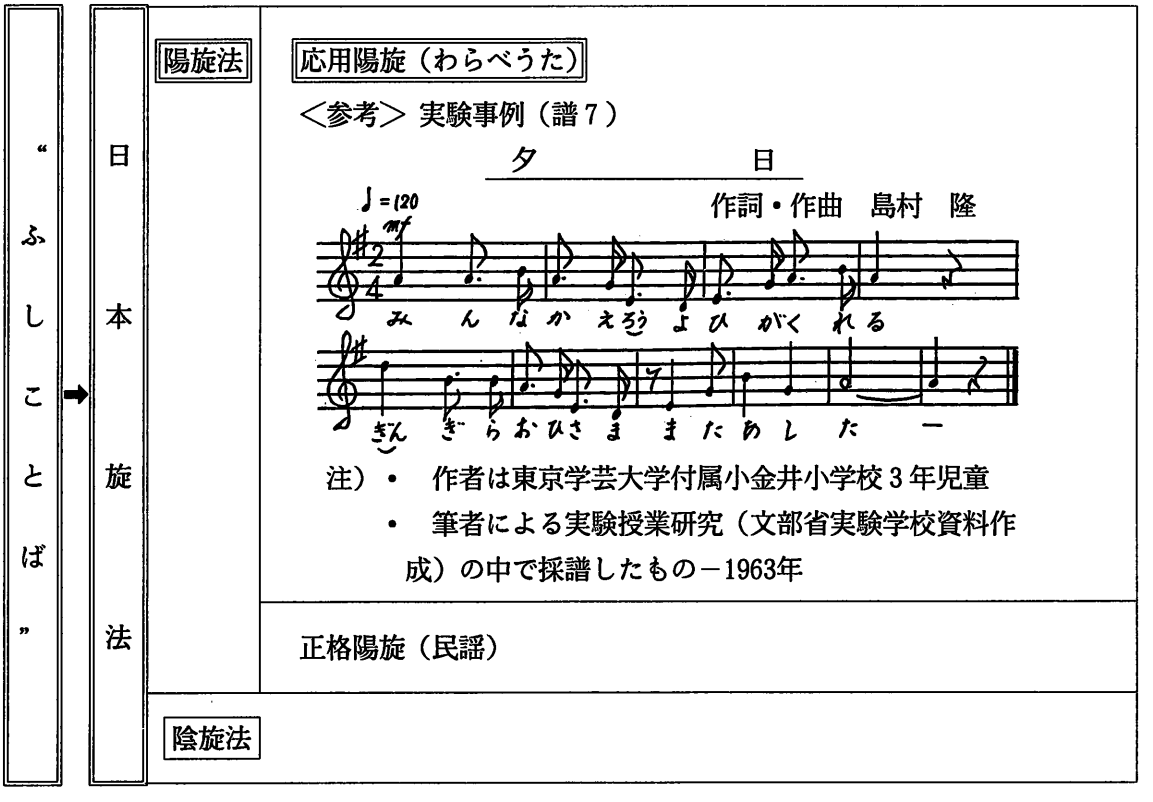


注）　はやいテンポ、アッチュレランドの要素

Ⅲ　“ふしことば”を起点とする音楽指導の意義

1．民族音楽としての伝統性尊重の立場から

“ふし”とも解され、同時に当然“ことば”でもある“ふしことば”こそは、強靱な民族性に根ざした誇り高い伝統的文化財の萌芽であり、この意味で実に貴重な地歩を占めるものであると思われる。

このあたりの態様を、幼児期～児童期前半の発達過程の中で押さえてみると、模式的に次の様に眺めることができる。



以上において、その考察を次のようにまとめることができる。

：　歌唱・創作の表現活動、及び鑑賞活動において、応用陽旋のものが圧倒的に主流である。

：　正格陽旋のものは、鑑賞活動に於て多少の扱いがある。

：　陰旋法は、歌唱・鑑賞活動において扱われる。

以上、日本伝統の音楽を長い歴史の研磨による素晴らしい光茫の宝石であるとすれば、今回の“ふしことば”こそがその原石！……の意義づけとなるであろう。極言すれば、「“ふしことば”は、日本旋律（陽）に同体である。」と言えよう。

2．創造性を指向する立場から

“ふしことば”の次元のものは、紛れもなく生れるべくして生れたものであって、決して考え込んで作られたものではない。

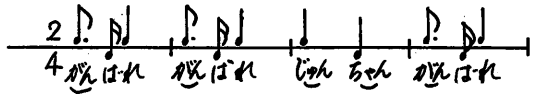
そこで、この夏、爽やかな志賀高原の山歩きで拾った筆者の気に行った微笑ましい情景～そ

の実写をひとつ置いてみる。

：　はしゃぎまわる小さい子ども達3人と、まだ若い夫婦の軽装の家族づれが、私たちの後に続いている。
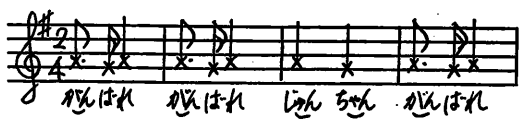
：　山歩きを励まし合うみんなの掛け声が聞こえてくる。アクセント・抑揚のきいたちゃんとした2拍子のリズム唱だ。

譜8



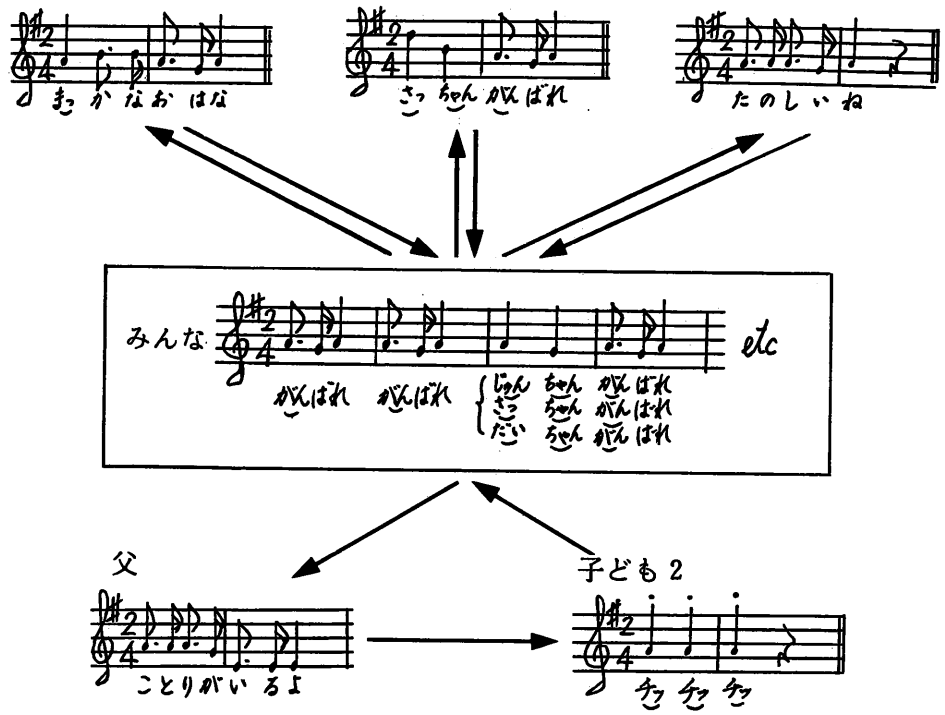
：　“おや？……五線にのりそうだぞ”

譜9



：　お母さんが仲間入りをした。お父さんも参加した。そして、みんな入り乱れての賑やかな即興の応酬である。（途切れると、また♪がんばれ　がんばれ……♪に戻る。）

譜10　子ども1　　母　　子ども3



：　まもなく家族づれは私たちを追い越していった。

以上である。

私は、心から羨ましい気持になった。

そして、考えた。……「即興こそ大切！～“ふしことば”こそダイヤの原石！～それを研磨するのが私たち教育者！」

すなわち、即興的自己表現こそは、創造性を指向するに、方法・手段として核的な視点として目されるものであり、現代的意義への最優先のテーマと言って過言ではない。

そして、笑いに満ちたのびのびとした遊びの場こそが、明るい“ふしことば”遊びを保証する決定的なステージであると言えよう。

創造性への指向	① 純真無垢の即興的自己表現 ↓ ② 意欲満々の創造的自己表現 ↓ ③ ふくよかな創作活動（児童期後半以降）
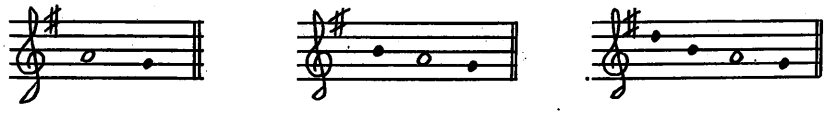
以上を念頭にして、子どもの輝く眼、はずんだ胸からの発信～“ふしことば”の成長に絶大の期待を寄せたいと思うのである。

Ⅳ　現代“ふしことば”（事例）の楽理的検証にみる教育的視点

1．事例にみる模式的基本構造の検証

A　エンゲメロディー型――核音を1つだけ持つもの
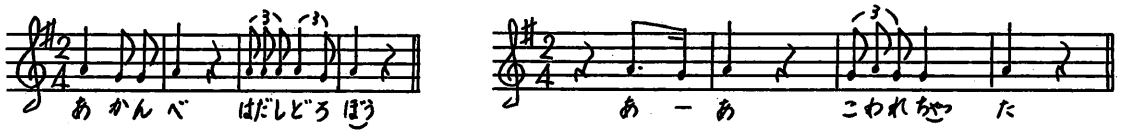
譜11　a類……2音列　b類……3音列　c類……4音列



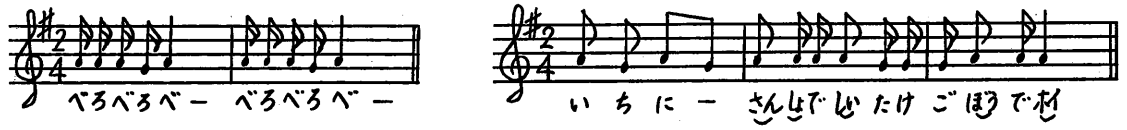
譜12

a～①……発唱レ、終止レ

ア　「あかんべ」　イ　「つみき」（※）

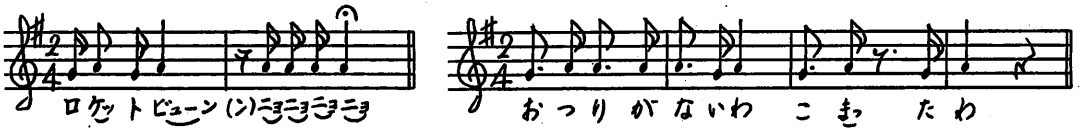


ウ　「べろべろべー」　エ　「どんぐりケーキ」



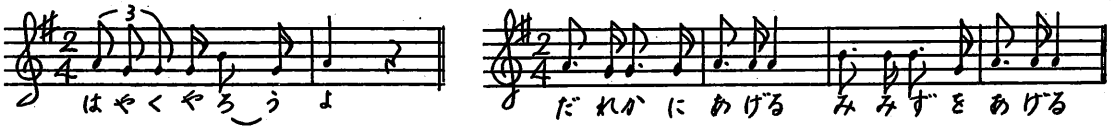
②……発唱ド、終止レ

ア　「ロケット」　イ　「おみせやさん」
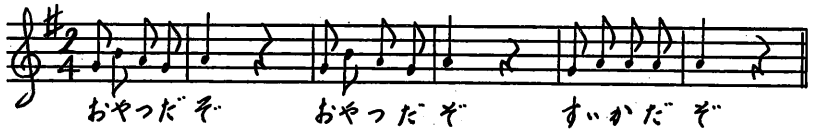


b～①……発唱レ、終止レ

ア　「サッカー」（※）　イ　「みみず」（※）
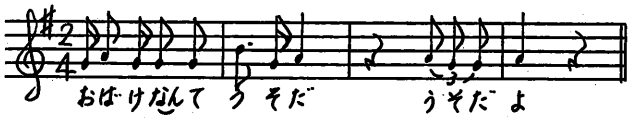


②……発唱ド、終止レ

ア　「おやつ」
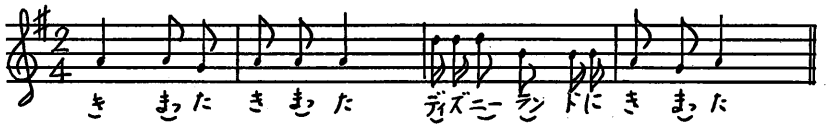


イ　「おばけ」



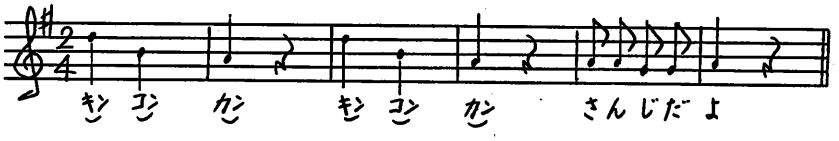
c～①……発唱レ、終止レ

ア　「えんそく」
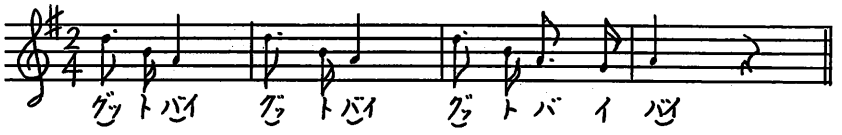


②……発唱ソ、終止レ

ア　「時計」
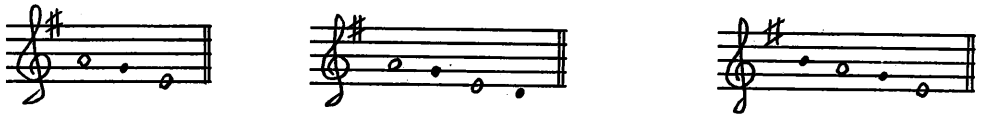


イ　「グットバイ」(※)



B　テトラコード型――伝統の核音程～完全4度の枠の中に、中間音を1つだけ持つもの

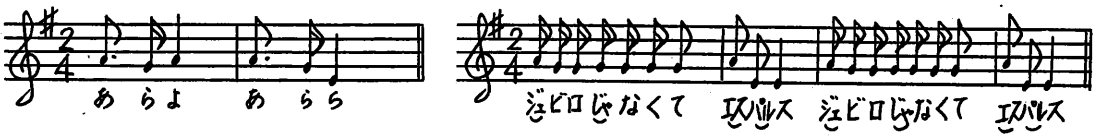
譜13　a類……3音列　b類……4音列（その1）　c類……4音列（その2）



譜14

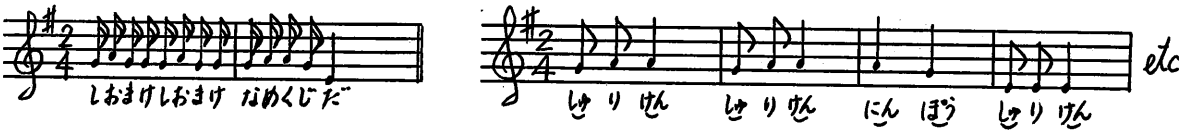
a～①……発唱レ、終止ラ

ア　「いたずら」　イ　「パルちゃん」
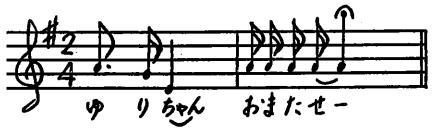


②……発唱ド、終止ラ

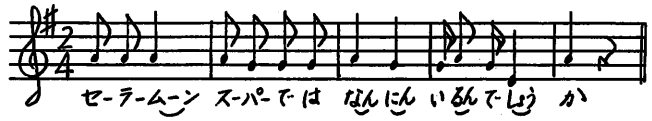
ア　「なめくじ」　イ　「忍法手りけん」



③……発唱レ、終止レ
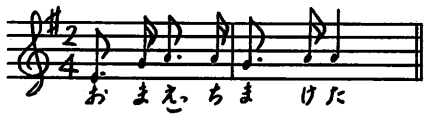
ア　「なかよし」　イ　「セーラームーン」



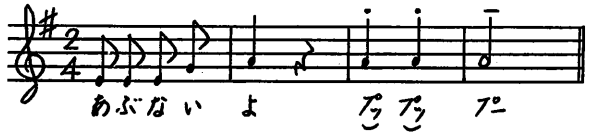


④……発唱ラ、終止レ

ア　「サッカー」
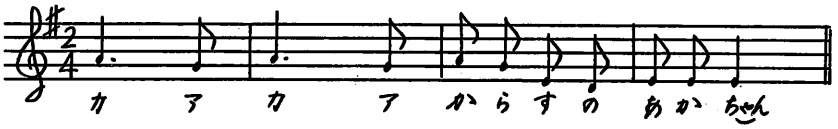


イ　「のりものごっこ」
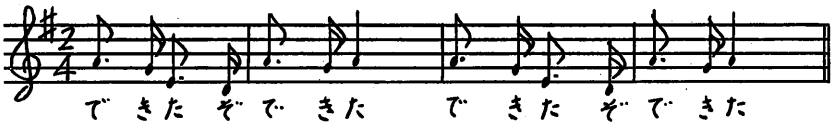


b～①……発唱レ、終止ラ

ア　「からすの赤ちゃん」
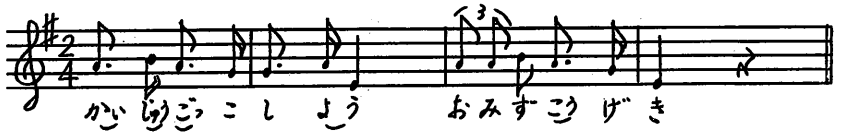


②……発唱レ、終止レ

ア　「ねん土ざいく」(※)
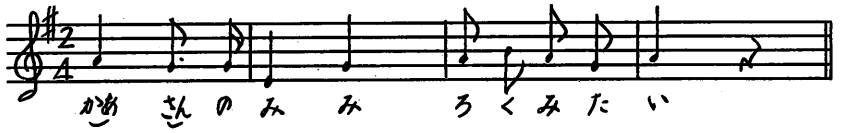


c～①……発唱レ、終止ラ

ア　「かいじゅうごっこ」



②……発唱レ、終止レ

ア　「かあさんの耳‘6’みたい」



注）　＊　以上にみる“ふしことば”の模式的基本構造の捉え方――その手法は、参考文献2・3および4に負うところが大きい。

＊　譜11・譜13に現われた全音符は、それぞれ核音を示す。

＊　“ふしことば”の事例は、幼児の遊びから、または実験保育の中で蒐集された全291例（平成6年5月～平成7年12月、於静岡市・東京都・その他）からの抜粋である。

但し、※のものは、1994年5月の日本保育学会に於いて発表されたものからの抜粋である。

2．事例にみる教育的視点の検証

前項で検証の楽理的基本構造の内容に対して、25事例の個々について教育的視点からこれを検証～その要点の指摘を置くと次のようになる。

Aエンゲメロディー型

＊　「あかんべ」（a～①～ア）

- “ふしことば”に大変多くみる“にくまれことば”のひとつである。
- 何が何やら全くに意味不明——これは即“ふしことば”によく見る特有の1つの側面でもある。「ずいずいずっころばし」に対比して考えると興味深い。
- 第3小節に時代の匂いを汲み取ることができる。リズムを楽しんでいる愛らしい情景が何とも言えない。
- a類①タイプのこの様な作例は、その頻数が際立って多く、指導上第1階梯のものとの考察が成り立つ。

＊「つみき」(a～①～イ)※

- これも“ふしことば”に多い“つぶやきことば”の例である。がっかりしたかわいらしい表情が目の前に浮んでくる。
- 発唱のリズムが実に素晴らしい。“ものすごい創作力！”の評価はオーバーに過ぎるかな？

＊「べろべろべー」(a～①～ウ)

- これも「あかんべ」に似たようなもの。くやしがって追いかけてくる友だちへの逃げ回りながらの“からかいことば”である。
- 地域によって、いろいろな表現をはしゃぎ回る遊びの中で観察することができる。
- 音組織的にはもちろん、旋律法的にみても、最も単純な構成である。

＊「どんぐりケーキ」(a～①～エ)

- 泥んこまんじゅうの上にどんぐりをちょんとのせて、どんぐりケーキの出来上がり。さあ！ いくつ出来たかな……微笑ましい仕草である。
- かわいい素材、気持のいいリズム……そして、楽しい“かぞえ歌遊び”。
- 変則的な3小節フレーズであることを頭に置く。

＊「ロケット」(a～②～ア)

- ことばのアクセントの条件から導かれるドの発唱のものは、①の場合に次いで子どもから表出の頻度が高い。このことは、指導上重要な留意点として銘記しなければならない。(次例「おみせやさん」も同じ。)
- ♪(ン)ニョニョニョニョー♪…… 天衣無縫のこの表現力こそは脱帽ものである。

＊「おみせやさん」(a～②～イ)

- 女の子らしい優しさに溢れていて本当にかわいらしい。
- “おつり”のアクセント表現、“こまったわ”のリズム表現など満点の出来栄えである。

＊「サッカー」(b～①～ア)※

- ことばのアクセントや抑揚が、全くにそのままの実写～速写と言っていい程のものである。男の子のサッカーへの意気込みが伺える。
- 長2度＋長2度のごく一般的なthree-tone melody①型である。(次例「みみず」も同じ)
- ここでは、極く模式的なものとして、94年度日本保育学会で紹介のものから登載した。(次例「みみず」も同じ。)

＊「みみず」(b～①～イ)※

- “みみずをあげる”の発想が実にかわいらしい。
- 「サッカー」の場合に同じく、遊びの中で自然にとびだした“呼びかけことば”(b

～①型）である。

＊ 「おやつ」（b～②～ア）

• 保育園でのおやつの時間～眼をまん丸くして小躍りする男の子の姿が手にとるように見えてくる。喜びの声が即座に“ふしことば”になっている。

• 長2度＋長2度のごく一般的なthree-tone melodyの②型である。（次例「おばけ」も同じ）

＊ 「おばけ」（b～②～イ）

• 茶目っ気に溢れた男の子の顔つきが見たいものである。

• かわいらしさの源泉は、主として後半部分のリズム的要素である。

＊ 「えんそく」（c～①～ア）

• 待ちどおしい待ちどおしい遠足……それが、夢にまでみていたディズニーランドに決ったのである。思わずとびだした“はやしことば”である。

• 短3度＋長2度＋長2度の一般的なfour-tone melodyの①型である。

＊ 「時計」（c～②～ア）

• 擬音を捉えての“ふしことば”化……もう完全な作曲である。異色のものと言えよう。

• 短3度＋長2度＋長2度の一般的なfour-tone melodyの②型である。（次例「グットバイ」も同じ）

＊ 「グットバイ」（c～②～イ）※

• 今度は、お帰りのご挨拶で、英語の“ふしことば”化である。時代を感じさせる。

• 実例の極めて少ない短3度＋長2度の3音旋律の、更に長2度下にド（G音）が附加されて、4音旋律②型としてまとまったものである。（前例「時計」も同じ）

• ここでは、模式性の高い94年度日本保育学会で発表のものを採った。

B テトラコード型

＊ 「いたずら」（a～①～ア）

• 子どもたちお得意の“からかいことば”である。

• 順次進行だけで成り立ち、中の♪レ～ド～ラ♪の進行は、民族色豊かな語法である。つまり、半終止的・属音的機能を持つ「ラ」音への進行がかもしだす特徴的な情趣がそれである。

＊ 「パルちゃん」（a～①～イ）

• エスパルスのマスコット“パルちゃん”のぬりえ遊びでとびだした声援の“ふしことば”である。

• 中に含まれるレ→ラの跳躍音程の中間音ド――これが前もって“先埋め”されている日旋に特徴的な旋律法にも注意を払いたい。

＊ 「なめくじ」（a～②～ア）

• なめくじに“塩まけ”の取り合せが面白い。

• 長2度＋短3度の音構成の中で、2つの基音が作る伝統性の完全4度……three-tone melodyの第②種である。（次例「忍法手りけん」も同じ）

＊ 「忍法手りけん」（a～②～イ）

• いたずら盛りの現代っ子に似合いの素材である。

• 旋律法的には、前例「なめくじ」に全く同様の手法である。

- 類例は、「なめくじ」を含めた2例の他にもなかなかに多い。

＊「なかよし」(a～③～ア)

- ♪おまたせー♪の表現がこの上なくやんちゃで、現代っ子の面目が躍如として達者なものである。

つまり、完全終止的機能をもつ基音「レ」の1音だけを、今の時世のリズムにのせた処理の効果と見ることができる。傑作である。

- 類例は、a類の中では少ない方である。

＊「セーラームーン」(a～③～イ)

- うっかりしていては、ついて行けない今の子どもの世界である。今度は美少女戦士「セーラームーン」の登場——この子どもに独自の領域～とび出してくる題材に注目の要がある。
- 口をついて出る自由奔放な5小節フレーズ(奇数小節)でもある。

＊「サッカー」(a～④～ア)

- 静岡地方に行なわれる方言の登場である。丸出しの方言と“ふしことば”の深い深い因縁～これも重大である。“ふしことば”には、地でいった方言がぴったりのところが有るのである。
- 「ラ」音の発唱、順次的な伝統の上・下行で極めて模式的な旋律である。「レ」の終止。

＊「のりものごっこ」(a～④～イ)

- 自動車のクラクション(擬音)の“ふしことば”化を含んでいる。基音「レ」の1音だけによるリズムの表情が無雑作でかわいい。
- このa類④のタイプの作例もかなりに多い。

＊「からすの赤ちゃん」(b～①～ア)

- ことばの抑揚の流れがそっくりそのまま陽旋のルールにのって、順次進行の旋律線に写し出されている。——そこで、初めての「ソ」の音が抵抗なく出現ということになる。
- そこに導いた♪かあかあ　からすの……♪——ことばに現われた傍点のところの視点も極めて重要である。
- 長2度+短3度+長2度のfour-tone melodyのbの第①種で、数少ない事例の1つである。

＊「ねん土ざいく」(b～②～ア)※

- ♪できたぞできた♪……喜びの声の単なる繰り返しであるところに限りない子どもらしさを感じることが出来る。
- 長2度+短3度+長2度の four-tone melodyのbの第②種——歌い出しはレ、歌い終わりもレである。これも作例は少ない。
- 94年の実験調査からのものである。

＊「かいじゅうごっこ」(c～①～ア)

- “おみずこうげき”の表出が微笑ましい。
- 同じ4音旋律でも、その作例は、b類に比べて更に少なくなってきている。特記すべきことである。(「かあさんの耳‘6’みたい」もまた同じ)

＊「かあさんの耳‘6’みたい」(c～②～ア)

- ♪かあさんの耳‘6’みたい♪……奇抜な着想が思わず笑いを誘う題材である。ママ

が大好きでたまらない甘ったれ顔が見えてくる。家庭での“甘えことば”である。

- 類例の少なさは、いわゆる“ふしことば”への訣別～“わらべうた”への移行・発展の時を迎えたことへの示唆でもあるように思える。これは、今回の命題の為に大切なポイントであろうと考えられる。

以上、本節「現代“ふしことば”（事例）の楽理的検証にみる教育的視点」に於ける論旨をまとめると、その骨子は次のようである。

☆　“はじめにことばありき”――しかし、そこには常に“ふし”の要素が同居している。“ふしことば”の意義はここに存在するのである。

☆　可愛らしい情動の源泉～楽しい遊び・幸せな生活こそが素晴らしい表現を生む土壌である。

☆　表出はすべてが即興～そして創造的表現へ……これこそが指導への方法原理である。

☆　実験研究で得た次の資料は、指導への間違いのない示唆を提供するものである。

“ふしことば”の事例にみる模式的基本構造			事例の現れ方 '94 ⟶ '96				教材性
Aエンゲメロディー型（核音1つ）	a　2音列（[レ]、ド）	発終 ①レ～レ ②ド～レ	39%	57%	41%	59%	◎ ◎
	b　3音列（ミ、[レ]、ド）	①レ～レ ②ド～レ	17		15		◎ ○
	c　4音列（ソ、ミ、[レ]、ド）	①レ～レ ②ソ～レ	1		3		○ △
Bテトラコード型（核音2つ）	a　3音列（[レ]、ド、[ラ]）	①レ～ラ ②ド～ラ ③レ～レ ④ラ～レ	31	43	35	41	◎ ◎ ○ ◎
	b　4音列（[レ]、ド、[ラ]、ソ）	①レ～ラ ②レ～レ	8		4		△ △
	c　4音列（ミ、[レ]、ド、[ラ]）	①レ～ラ ②レ～レ	4		2		△ △

V　結論

今回の「現代“ふしことば”論――その教育的意義と楽理的検証」で、一応の成果として考

えたのは、教育の現代性への本質的な視点・最優先のテーマとして「創造性への指向」を示唆し得たことである。そして、そのためには、この度浮き彫りにされた次の枠組み〜構想に明らかであるように、“ふしことば”こそが、そこへのかけがえのない一つの足がかりとして重要だということである。

★ “ことば”は、常に“ふし”と同居し、“ふしことば”となる。
★ “ふしことば”は、子どもの情動の原初的な発現〜自己表現である。
★ その発唱は、常に即興の様式で行なわれる。
★ 種子は即興の“ふしことば”、そして発芽から見事な開花への行き届いた営み——これが創造性への育ちを約束する指導である。素朴な情動が美的情操にまでと言うことである。

注）以上を通じて、常に“ふしことば”が秘めて持つ強靱な伝統要素の視点に留意の必要がある。

さて、時代は、題材・素材を変えても、生きる子どもの心の叫び・気分の迸りである“ふしことば”は依然として健在である。そして、その中には、真に人間的な音楽リズムの基礎体験をみてとることが出来るのである。

最後に、陰旋の関係についてであるが、今回のところ“ふしことば”の形では出にくかったようである。しかし、“ふしことば”の主流は、間違いなく応用陽旋と断定できよう。

Ⅵ 残された問題

世は、正に溢れるエネルギーに身体がのってくるテンポ快調の時代——子どもを囲む環境の遷り変りも目まぐるしい。このこともあって、“ふしことば”に関わる命題をさらにさらに拡げ深めて、論点をより焦点化しての継続的な取り組みの必要性を痛感するものである。

課題として、次の様なものを考えている。

★ 「“ふしことば”から“わらべうた”へ」——多面的な考察
★ “ふしことば”と“動きのリズム”・“遊び”との相関
★ “ふしことば”を起点とする“創造的”領域のカリキュラムの作成
★ 揺れ動く時代の波が及ぼす“話しことば”〜“ふしことば”への影響
★ Dur、mollの世界との調性融和の問題
★ 日本旋法に於ける伝統性について

参考文献

1．武田道子、1990、「幼児の音楽文化にみる伝統性と現代性について」八千代出版
2．武田道子、1994、「“ふしことば”遊びの教育的再組織」日本保育学会研究論文集
3．飯田秀一、1966、「わらべ唄・民謡における比較音楽学的基本構造論の教育的再組織の問題」東京学芸大学紀要第18集第5部門
4．小泉文夫、1958、『日本伝統音楽の研究』音楽之友社